

アーティストが育つ 活気と魅力ある大阪に

大阪中之島美術館 × 関西・大阪21世紀協会 共同企画

Osaka Directory

おおさか ディレクトリ
supported by RICHARD MILLE

「文化の担い手を育てる」を行動指針の一つとする関西・大阪21世紀協会は、これまで若手アーティストの作品が市民の目に触れるさまざまな機会をつくり、作家の活動を支援してきました。今年度設立40周年を迎え、大阪中之島美術館と共同で、関西・大阪ゆかりの若手実力アーティストを個展形式で広く紹介する「Osaka Directory*」を3期にわたり大阪中之島美術館で開催。この取り組みを通して大阪におけるアートシーンが活気づき、国内外から「アーティストが育つ、活気と魅力のある都市」として大阪が認知され、地域の賑わいに貢献することをめざしています。

*Directory…英語で「名鑑」の意。この展覧会を重ねることで、関西ゆかりの「アーティスト名鑑」になればとの思いが込められている。第1期の赤鹿麻耶展は2022年8～9月に開催。



大阪中之島美術館

第2期

2022年11月23日～12月25日



まし まおや

貴志 真生也 「きれい」ではなく「なんだろう?」という感覚

美術作品にはあまり使用されないような素材を使って、今までに見たことのない景色を作り出す貴志真生也さん。Osaka Directoryでは、人の背丈を越えるものから手のひらに乗るものまで、新作6点を含めた大小11点のインスタレーション作品が展示されました。発泡スチロールや角材、ビニールシートなどの素材(工業製品や資材)をそのまま用いた作品は、その素材が新たな存在感を放ち、驚きや疑問、困惑など観る人のさまざまな感情を呼び起こしました。

その中の一つ《ミラーボールの塔》は、主役とその裏側にあるものが組み合わさったらどう見えるか、という発想から生まれた作品。角材やワイヤーなどで組んだ架台に自転するミラーボールが天秤状に吊るされ、煌めくミラーボールとそれを支える無骨な架台の



《良い素材集#4》2022年
発泡スチロール、ブルーシート、トラックシート、ビニールシート、キャンバス生地、割り箸、角材、合板、ネット、ビニールタイ、布、アクリルケース(高さ約30cm)

両方が目に入ることで、華やかな世界を支える裏側の存在を実感させるようでした。

「観た瞬間に“きれい”ではなく“なんだろう?”という感覚が生まれることを期待している」という貴志さん。



《ミラーボールの塔》2022年
角材、合板、ミラーボール、ワイヤー、金具、ミラーボール用モーター、結束バンド(高さ約2.5m)

初日に行われたアーティストトークでは、「世の中にはまだまだ分からないものがあり、新しい見え方をするものがあることを感じていただければうれしい。“きれい”や“汚い”



作品解説をする貴志真生さんと来場者(2022年11月23日/アーティストトークにて)

だけで割り切れない混沌とした世界を作品に投影したい」と語りました。

プロフィール

1986年大阪府生まれ。2009年京都市立芸術大学彫刻専攻卒業。看板、建物、社会といった、人によってつくられた環境をモチーフとし、その意味を問い直す作品を制作。発泡スチロール、角材、ブルーシートなどの工業資材を見立てによって作品とする。素材は規格そのままに、作家の手の痕跡を残さないよう意識して、不要な意味を排除したシンプルな形態へと落とし込んでいる。これまで東京、京都、神戸などで個展を開催。2011年にはメゾン・エルメスのウィンドウディスプレイを手がけた。

第3期 2023年1月20日～2月26日



えんどう かおり

遠藤 薫 美しいものの背後にある人々の営み

工芸の美しさに加え、それが作り出された時代背景や人々の暮らしを、インスタレーション手法を用いて表現する遠藤薫さん。作品《重力と虹霓／南波照間島

について》は、沖縄に伝わる「南波照間島(パイパティローマ)伝説」を中心に、南西諸島で古くから使われた丸木舟を制作し、糸芭蕉(バナナ的一种)の繊維で織り上げた芭蕉布を帆に仕立て作品化したものです。



茶色の帆は米軍嘉手納基地とフィリピンのバナナの繊維で織られ、緑色の帆は1964年の米軍払い下げパラシュートを再利用して作られた。丸木舟(杉・全長約5m)は石垣島で船大工を営む吉田友厚さんが製作。

南波照間島は、日本最南端の波照間島のさらに南にあるとされる想像上の島。かつて薩摩藩支配下の琉球王府で厳しい人头税を課せられた波照間島の島民は、その徴収から逃れるため、役人が乗ってきた舟を盗んで黒潮を南下し、南波照間島にたどり着いたといわれています。遠藤さんは作品を通して、そのような物語を語り継がなければならなかった島民の暮らしぶりについて思考を巡らせています。

また、沖縄の工芸には戦争や基地につながるものもあります。例えば「琉球ガラス」は、1945年の地上戦の際に米兵が飲み捨てたコーラの空き瓶を溶かして作り直したのが始まりとされ、黒糖や米粉などを混ぜ入れて、あえて泡を立たせた美しさが特徴です。

帆の芭蕉布は、遠藤さん自身が米軍嘉手納基地の黙認耕作地に生えるバナナを採取し織り上げました。「美しい事物の創造に必ずしも過酷な環境が必要だとは思わないが、意識するしないにかかわらず、人々の抵抗と無抵抗の形が美しさとして現れる」という遠藤さん。作品には、そうした人々の痛切な生の跡をなぞることで、そこに虹が立ち上がることを願う思いが込められています。



コーラ瓶の再生ガラスについて説明する遠藤薫さん(2023年1月21日/アーティストトークにて)

プロフィール

1989年大阪府生まれ。2013年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016年志村ふくみ(紬織、重要無形文化財保持者)主宰アルスシムラ卒業。沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係性を紐解き、主に染織技法を用いて制作発表を続けている。雑巾や落下傘、船の帆などを制作し、「使う」ことで布の生と人々の生を自身の身体を用いてパフォーマンスにトレースし、工芸の本質を拡張することを制作の核とする。東京や沖縄などで個展を開催。「第13回 shiseido art egg」ではart egg賞を受賞。

大阪中之島美術館 | 2022年2月2日開館。地上5階建ての館内に、モディリアーニや佐伯祐三など国内有数の近代・現代美術作品6,000点以上を所蔵。今年4月15日～6月25日に開館1周年記念特別展「佐伯祐三 一自画像としての風景」を開催。